シンポジウム「大阪のまちづくりグランドデザイン」

大阪府、大阪市、堺市は、2050年に向けた大阪全体のまちづくりの方向性を示す「大阪のまちづくりグランドデザイン」を昨年12月に策定した。このグランドデザインを基に、これからの大阪はどのようなまちを目指し、創っていくのかを考えるシンポジウム「大阪のまちづくりグランドデザイン」（大阪府、大阪市、堺市主催）が、９月１日に大阪市北区の大阪中之島美術館ホールで開催された。大阪のまちづくりの今後の展望や鉄道沿線のまちづくりなどをテーマに、基調講演とパネルディスカッションが行われた。

大阪府・市と堺市 2050年への方向性を考える

新たな都心と新たな郊外の創出を

大阪公立大学研究推進機構特別教授
橋爪　紳也氏

基調講演

大阪にあっては、過密など都心で生じる課題を常に郊外が引き受ける形で大都市圏が発展してきました。戦後復興では、三大環状道路と都心から郊外に伸びる放射状の道路網が骨格に据えられ、昭和57（1982）年の大阪府総合計画でも継承されます。

対して平成3（1991）年の新総合計画では意識が変わり、ベイエリアを結ぶ大阪湾都市軸と内陸環状都市構想が出てきます。

この流れを踏まえて、私は大阪府、大阪市、堺市に、大阪湾環状軸と関西大環状軸という二重のループを骨格に、その間に個性的な都市群が配置される形が、これからのあるべき大阪圏域の姿ではないかと提案しました。以前の全国総合開発計画で示された西日本国土軸と太平洋新国土軸をもう一度、意識しながら、和歌山、奈良、京都、兵庫を含めた大阪圏を描くべきだと考えます。このイメージをマルチハブ&ネットワークという構造に落とし込み、グランドデザインをまとめました。

私たちは2025年大阪・関西万博の後に、どのような大阪を創るのか。今、求められているのは、高度経済成長期に整備された都心と郊外に手を入れて、新しい時代の必要性に応じた大都市圏に改めることだと考えます。

今回のグランドデザインでは、都心と郊外の新たな関係性の構築を意識しています。明治時代、大阪は産業の集積地として「煙の都」「東洋のマンチェスター」という名前を持ちます。さらに大正から昭和にかけて多くの産業が勃興し、市域を拡張して東洋一の商工都市となり、人々は誇りをもって「大大阪」と称しました。それほどの集積と経済力が大阪にあったということです。

大阪の時代に関一市長は、都市にも人格と同様に都市の格があり、それを高めようと強調しました。日本の都市では他に先んじて都心に美観地区を指定し、欧米に負けない大都市を構築しようとしました。その精神を継承しつつ、世界に訴求する魅力的な都心を創り上げる必要があります。新大阪や森ノ宮などで新たな都市を創造することが求められています。

同時に郊外のリノベーションを進めなければいけません。そこにあって東西軸の再構築が重要になります。１９７０年大阪万博の後に、東西軸の必要性が語られました。大阪府は、今の彩都となる国際文化公園都市を構想し、学研都市とを結ぶ東西軸の拡充を主張しました。一方、大阪市はテクノポート大阪を具体化し、南港と都心、学研都市に至る東西軸の拡充を重視していました。今、改めて大阪湾ベイエリアと都心、大阪城東部地区、さらに東大阪や学研都市に至る新たな東西軸が、次の大阪を担う軸線となることが期待されます。

大阪都市計画局計画推進室
計画調整課長
木村　佳英氏

多様な主体が一体となり 大阪全体のまちづくりを推進

グランドデザインは、2025年大阪・関西万博やスーパー・メガリージョン形成などのインパクトを生かし、東西二極の一極を担う「副首都」として、大阪がさらに成長、発展していくため、大阪都市圏全体を視野に、2050年を目標として大阪の目指すべき都市像やまちづくりの方向性、その推進の取り組みなどを示すものとして昨年12月に策定しました。このグランドデザインを羅針盤として、民間の活力を最大限に引き出しながら、多様な主体が一体となって大阪全体のまちづくりを推進し、成長する大阪を目指します。

まちづくりの基本目標として「未来社会を支え、新たな価値を創造し続ける、人中心のまちづくり」を設定し、将来像として「魅力的な国際都市として成長する大阪」「健康長寿で誰もが幸せを実感しながら暮らせる大阪」「未来へつながる安全・安心な大阪」の実現を目指します。その実現に向けては、３つの視点「多様性の確保」「共創」「資源の活用」を重視し、まちづくりを進めます。

広域レベルでは、広域的な都市構造を生かした都市圏の形成として、スーパー・メガリージョンの西の核、世界のゲートウエーにふさわしい都市圏を形成することとしています。府域レベルでは、マルチハブ&ネットワーク型都市構造の形成として、都心部やベイエリアにおける国際競争力を備えたエリア形成とともに、交通ネットワーク上を中心に特色ある拠点エリアや魅力ある生活圏を形成し、相互に連携する都市構造を目指します。

拠点どのように楽しむか まちの特色を磨き上げる

パネリスト
橋爪　紳也氏
大阪公立大学研究推進機構特別教授
松島　格也氏
京都大学防災研究所特定教授
谷　　貴文氏
ＪＲ西日本地域まちづくり本部
交通まちづくり戦略部沿線まちづくり部長
コーディネーター
内田　博文
産経新聞社大阪編集局社会部大阪総局長

パネルディスカッション

松島氏　――まずマルチハブ&ネットワークが、まちづくりにどのような方向性をもたらすのかをお願いします

橋爪　従来は、都心の機能を移転する、エリアを新都心、都心の機能を補完し、分担するエリアを副都心と称して、母都市の周辺に新しい拠点を分散させてきました。対して、これからは多様な拠点が各地域で自立することが必要です。巨大な集積のまわりに衛星都市がある構造ではなく、さまざまな個性を有する核が点在し、連携している、そのような圏域を創っていきたいと思います。

松島格也氏

松島　人々がどのように拠点を使うのかが大事です。それを考える上で重要となるのは余暇です。その地域に行かないと楽しめないサービスが大事で、その地域に根付いている文化を生かした楽しみ方をみんなでつくり上げていきたいと考えているところです。それがマルチハブ&ネットワークどのように関係するのかですが、都心だけが中心ではなくて、複数の中心を持つ設計に変わるということです。郊外同士が物理的に道路でつながっているだけではなくて、どのように連携していくかが大事だと思っています。

結局、まちづくりをする方が考える以上のものを皆さんがどのようにつくり上げていくかが大事で、拠点を自由に使ってもらったらいい。そこから、いろいろなイノベーションが生まれます。多様性を許容する大阪ならではの土壌を踏まえて、いかに拠点を楽しむかを考えていきたいと思っています。

谷　ＪＲ西日本がどのようなまちづくりをしているのかですが、沿線にはいろいろな特色あるまちがあります。特色のあるまちを場所に合った個性に磨き上げながら、鉄道ネットワークで結んで、多様な移動目的を持って、リアルに動いていただく。そのことによって交流関係人口を増加させ、エリア全体を生き生きとしたまちにしていこうという戦略で、沿線のまちづくりを行っています。

――鉄道を使ったまちづくりの状況をお話しいただいて、考えを深めていきたいと思います

谷貴文氏

谷　最初の事例は富山市です。北陸新幹線という高速広域ネットワーク開通で拠点性が飛躍的に高まった富山駅を中心に、市の南北公共交通で移動しながら楽しむまちづくりが進んでいます。次の事例は京都府日田市で、先端企業が集積しています。その特色を生かしたまちづくりをしよう、脱炭素テクノロジーの集積地を作ろうとしています。最後の事例はＪＲ学研都市線です。２月から３月にかけてデジタルスタンプラリーを行い、違った魅力のある都市を鉄道で移動していただきながらエリア全体の価値を感じていただく取り組みをしています。

橋爪　私は、新大阪地区の将来的な発展に期待しています。新大阪を中心に置いて将来の絵を描くべきではないかと申し上げています。現在も新大阪駅の乗降客数は博多駅とほぼ同じなんですね。今後、北陸新幹線とリニア中央新幹線が乗り入れ、今の名古屋駅や品川駅の乗降客数を超えることが想定されます。だとすれば、その規模のまちを周辺に創出することができるはずだと思います。単なる乗換駅ではなく、自立した都市として新大阪のポテンシャルを生かしていくべきだろうと考えています。

松島　学研都市線の話が出ましたが、学研都市線は奈良につながっています。今回のグランドデザインは、必ずしも大阪府だけを対象にしているわけではありません。府と県をまたぐのが、これからは大事になるのではないか、と。それが今回のグランドデザインにも生かされていると思っています。

――最後に、これからのまちづくりに必要な観点を一言ずつ頂戴したいと思います

橋爪　万博を契機に世界中の人が大阪に注目します。そこにチャンスがある、誰もが憧れる、オンリーワンの「面白い都市」を目指していきたいと思っています。

松島　観光の範囲を広げるというか、これまでの典型的なものだけではなく、ちょっとしたことを生かしながら楽しめるまちづくりを進めていければと考えています。

谷　各都市の持つ個性を一緒に磨き上げて、きらりと光る都市が大阪府下にたくさんできて、そこを移動してみたいと思っていただけるような鉄道ネットワークでありたいと思っているところです。

鉄道沿線のまちづくりをテーマにパネルディスカッションが行われた